

2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

上野由香里 「終身刑導入の是非 ——最も望ましい刑を求めて——」

これからは裁判員制度の導入により、プロの裁判官に混じって一般市民も刑事裁判に臨むこととなりますが、被告人の有罪・無罪を判断し量刑を決めることは、大きなプレッシャーを伴う困難な仕事であろうと思われます。冤罪が生じる恐れも否定できません。特に死刑や無期懲役に相当するような重大犯罪のケースでは、死刑によって被告人の命を奪うことにもなるので、さらに困難が予想されます。

最近では法相が自動的に死刑執行すべきだとの見解を出し、実際に異例のスピードで死刑が執行されているようですが、死刑制度に対しては国民の間に賛否両論あり、死刑制度を廃止すべきだという主張も決して少なくありません。

上野さんは当初、死刑制度の是非を論文のテーマとして考えていました。死刑制度に反対の立場から書かれた本は多いが、賛否両論の主張を整理・紹介するだけでは、論文としてそれ以上の展開を見込めませんでした。

そこで、上野さんは少し視点を変えて、終身刑に着目しました。死刑廃止論者がよく主張するのは、死刑の代わりに終身刑を導入すべきだというのですが、ひとくちに終身刑といっても、その内容は日本ではあまり知られていません。はたして、終身刑を導入すれば事は足りるのでしょうか。

終身刑といっても、その内容は国や地域によって大きく違うことが、調べてみて分かりました。また、終身刑と日本の無期懲役との違いも分かりました。

日本の死刑や無期懲役は、いつ死刑執行になるのか分からない、いつになったら仮釈放されるのか分からないという展望のなさが、根本的な問題であるということが明らかになったと思います。

本論文は、きわめて緻密な論理構成と、海外と日本の比較研究によって、説得力のある結論を導き出しており、とても質が高い論文といえます。

死刑制度に関する世論はとかく感情に流れがちになりますが、感情に流されず、冷静で科学的な議論が求められていると思います。